

野川と国分寺崖線の自然を訪ねる 2024 年 12 月 14 日(土)

今回の学外研究は、多摩川が作りあげた武蔵野段丘と立川段丘との間の段丘崖、国分寺崖線とそれに沿って流れる野川の自然と歴史を訪ねます。本来は、東京都調布市の深大寺から武蔵小金井駅まで下流から上流に向けてあちこち見学しつつ、散策し通すことができればよいのですが、時間の制約もあり国立天文台三鷹キャンパスと三鷹市大沢界隈の自然を中心に、水車小屋、ワサビ田、横穴墓などの野川や湧水に支えられた人々の生活の歴史に触れつつ野川公園の自然観察園まで歩きます。最後は三鷹へのバス停近くの近藤勇の菩提寺・龍源寺を参観したいと考えています。懇親会を三鷹で行いますので参加できる方はご出席下さい。

I. 集合場所等

集合場所: 国立天文台三鷹キャンパス入り口前

集合時間: 午前 10 時 00 分

以下のバスを利用すると 10 時前に集合できます。他にも粕江駅前や武蔵小金井駅からのバスもありますので適宜お選びください。

- 調布駅北口 9 時 32 分発天文台前 9 時 43 分着のバス(京王バス: 調布駅北口 13 番バス乗り場)
- 武蔵境駅南口 9 時 25 分発天文台前 9 時 38 分着のバス(小田急バス: 武蔵境駅南口 3 番バス乗り場)
- 三鷹駅南口 9 時 31 分発天文台前 9 時 49 分着のバス(小田急バス: 三鷹駅南口 5 番バス乗り場)

II. 予定ルートと予定所用時間

10 時過ぎに国立天文台三鷹キャンパスに入り、午前中は構内の観察順路に従い構内の自然、研究施設を見学します。午後は、大沢緑地でホテルの里、山葵田、大沢の里水車兼営農家、出山横穴墓群等を観察の後、野川公園に入り、自然観察園で自然観察を行います。その後は野川公園内を通り、近藤勇墓所のある龍現寺を参観し、そこで解散とします。

解散後は龍源寺前バス停から三鷹駅へ移動します。15 時 25 分のバスに乗り、三鷹駅前到着 15 時 54 分を予定します。以下がルート概要ですが、**各ポイント間の時間は下見時に確認**します。

国立天文台三鷹キャンパス～天文台の坂～野川～古八幡社～崖線下の道～飛橋～水車兼営農家～飛橋～ホテルの里～出山横穴墓群八号墓～大沢の里古民家～野川公園・国分寺崖線湧水群～野川公園自然観察園～龍源寺

1. 国立天文台三鷹キャンパスから大沢緑池: 大沢の里、水車兼営農家、出山横穴墓群へ

- ① 天文台前バス停を降りると天文台正門前です。天文台構内の見学を済ませた後、天文台通りをまっすぐ下ると野川です。天文台通りは野川から武蔵野段丘に向けて緩い登りとなっていますが、ここは国分寺崖線の細長い谷があった所で、その様子をよく観察できます。
- ② 天文台通りを大沢橋手前で右に折れて暫く進むと進行方向右手に小さいが古い神社があります。大沢「古八幡社」で、元禄年間の年号が刻まれた庚申塔が立っています。その後、暫く崖線下の道を歩きます。国分寺崖線下から、ケヤキやシラカシなどの樹木を良く目にします。国分寺崖線からの湧水を樋に流してポリバケツで受けている場所があったり、蓋をした側溝を流れる湧水の音がしたりします。でも、この湧水は直接飲料水にするには適さないようです。
- ③ 再び野川に出て、「飛橋」で左岸から右岸に渡り、三鷹市水車経営農家を訪れます。ここには通称新車(しんぐるま)と呼ばれる日本でも有数の水車が保存されています。(入園料は近くの古民家とあわせて 200 円です。)

- 新車は野川沿いに位置し、その機構の素晴らしさと高い文化財的価値から、東京都から「武蔵野(野川流域)の水車経営農家」として有形民俗文化財の指定を受け、さらに、日本機械学会からは「旧峯岸水車場」として機械遺産の認定を受けています。
 - 新車は、江戸時代の文化 5(1808)年頃に創設され、昭和 43(1968)年頃に野川の改修によって水流が変わるまでの 160 年間、回り続けていました。野川の改修工事によって水車の稼働は停止しましたが、八代目当主の峯岸清氏が水車全体を大切に保存してこられ、現在も、複雑な機構を持つ水車装置全体が良好な状態で保存されています。
- ④ もと来た道に戻り、再度「飛橋」を左岸に渡り、「ホタルの里」と三鷹市により命名されている場所に向かいます。山葵田や水田が周囲の人達により耕作され、今もその協力よりその景観が残されている所です。国分寺崖線と野川が近接している場所で、豊富な湧水を見ることができます。
 - ⑤ その豊富な湧水により古来人間の生活が営まれ、古墳時代以降に横穴墓(古墳)が数多く作られ、横穴墓群が密集している地域です。三鷹市では出山横穴墓群と呼ばれる墓群の第八号墓を公開していて、発見された遺骨は集められ、最後に訪れる近くの「龍源寺」に葬られ、供養塔が建てられています。

2. 都立野川公園から龍源寺へ

- ① ホタルの里の後は、野川に戻りその右岸を野川公園の自然観察園に向かって歩きます。対岸の左岸に新緑の国分寺崖線の崖を見つつかうということになります。右岸から最初の橋を左岸に渡ると、そこは広場になっていて、国際基督教大学の構内となっている国分寺崖線から水が滾々と湧き出る様を見ることができます。
- ② さらに暫く進むと野川公園自然観察園です。自然観察園には国分寺崖線や崖線下の樹木や草本の観察ができます。そこには崖線からの豊富な湧水もあり、いくつかの小池もあります。池の多くは、近くに中島飛行機の工場があったため、米軍による空爆を受けてその時投下された爆弾によってできたものだという話もあります。自然観察園の中は基本的には国分寺崖線からの湧水による湿地帯で、野川の土手にその水が浸潤しているのを見ることができ、湧水が極めて豊富であることを確認できます。
- ③ 自然観察園から龍源寺へもと来た道に戻ります。龍源寺は新選組局長近藤勇の生家宮川家の菩提寺です。山門の左手に近藤勇の胸像と天然理心流の碑があり、昭和63年3月に三鷹市剣道連盟の建立によるものです。寺の境内に入ると近藤勇の墓所があり、また出山横穴墓群から出土した古人達の人骨を埋葬した供養塔がありますので、立ち寄ってみます。

III. 参考情報

① 国分寺崖線

国分寺崖線は、古代多摩川が南へと流れを変えていく過程で武蔵野台地を削り取ってできた河岸段丘の連なりです。崖線には湧水が多く、市街地の中の親水空間として、また野鳥や小動物の生活空間として貴重な自然地となっています。国分寺崖線は立川市砂川九番から始まり、東南に向かって野川に沿って延び、東急線二子玉川駅付近で多摩川の岸辺に近づいて、以後多摩川に沿って大田区の田園調布付近まで続いています。延長は約 30km で、上流の立川ではほとんど高さがなく、都立府中病院付近では 15m ほどに高さを増し、世田谷区の成城学園から下流では 20m を超える高さとなっています。宅地化や農地化が進み、現在では崖線の面積に対して約 35%の樹林地が残っているのみです。東京都では、多摩川左岸に長区間連続する崖線緑地の一部で、崖斜面とそれに連続した崖上、崖下の平坦地を断続的に緑地保全地域に指定し、公有化を進めています。指定地域の面積は 37,195.06 平方メートルです。別紙「武蔵野台地を知る」もご参照下さい。

② 野川

野川は国分寺市東恋ヶ窪一丁目にある日立製作所中央研究所内の湧水を主源としています。全長 20.23 キロメートル、流域面積 69.6 平方キロメートルの一級河川で、源流から合流地点までおおむね国分寺崖線に沿って流れ、かつては大川ともよばれていました。

国分寺市・小金井市を横断する国分寺崖線に沿って東進し、多摩川の名残側と考えられています。国分寺市真姿の池や小金井市貫井神社・滄浪泉園など、崖線沿いの湧水を数多く取込みながら小金井・三鷹両市境で緩やかに南東に流れを変え、調布市・狛江市・世田谷区を通過して世田谷区玉川で多摩川と合流しています。

流域周辺には花沢西遺跡や殿ヶ谷戸遺跡（ともに国分寺市）をはじめとする多くの遺跡があり、旧石器時代から縄文時代にかけての遺物も数多く発掘されています。

別紙「武蔵野台地を知る」もご参照下さい。

③ 大沢の谷

大沢の谷は深大寺から 1.5 キロメートルほど北支に行った所に位置する、国分寺崖線二刻まれた細い谷です。谷に面して国立天文台の広い構内が国分寺崖線上にあります。地名の「大沢」の由来も、嘗てあった道の狭い細長い谷によるといわれていますが、現在は広々とした天文台通りが谷間を戸尾手います。嘗ては三鷹一番の湧水があり、その湧水は羽沢の車と呼ばれる水車を回し、山葵田を潤したといわれるが、今は坂の勾配も緩くなっていて、その面影は見られません。しかし、国分寺崖線の谷を代表する谷の一つです。

④ 国立天文台三鷹キャンパス

添付の国立天文台三鷹キャンパス紹介をご参照下さい。

⑤ 大沢の崖と野川

国立天文台三鷹キャンパスから野川公園にかけての大沢周辺は、国分寺崖線と野川が一体となった美しい景観を見ることができます。この付近が野川の流域の中で、国分寺崖線と野川が最も接近している位置といえます。大沢の里や野川公園では嘗ての水量があるとは言えないものの、今も豊かな量の水が崖下から流れ出て、典型的な崖線植生を観察できます。

この豊富な水と自然を求めて旧石器時代からこの辺りには人が住んでいて、古墳時代以降に築かれた出穴横穴墓群や野水橋横穴墓群など 6 箇所の横穴式古墳の遺跡があり、出山古墳群 8 号墓は実際に見学することができます。また、現存する水車経営農家については先述のとおりですが、詳細については以下をご覧ください。

■出水横穴墓群

三鷹市から調布市にかけての野川左岸沿いの国分寺崖線には、7 世紀半ばから 8 世紀初めにかけて造営された多くの横穴墓が存在し、これら横穴墓は全部で 7 つの横穴墓群に分けられ、出山横穴古墳群はそれらの横穴墓群のうちの一つです。7 つある横穴墓群の中間部付近の国分寺崖線の台地上に天文台構内古墳があり、築造時期もほぼ同時期と見られることから、天文台構内古墳は 7 つの横穴墓群の頂点に立つ首長を葬ったものと考えられています。

出山横穴古墳群については、三鷹市の説明によると、明治 17 年(1884 年)に「武蔵野叢誌」という雑誌に、出山横穴墓と思われる横穴墓が発見されたとの記事が掲載され、その際に出土した人骨は龍源寺で埋葬され、「穴仏」「横穴古墳供養碑」という二基の石碑が建てられています。出山横穴墓群が三鷹市内で最初に確認された横穴墓群として、正式に記録上に現れるのは昭和 38 年(1963 年)で、発掘調査は昭和 53 年(1978 年)から開始され、玄室の一部のみが残存する出山横穴墓群 1 号墓の発掘が行われました。昭和 59 年(1994 年)には近隣の道路整備中に 5 基の横穴墓が発見され、うち 2 号墓、3 号墓、4 号墓の一部が調査され、5 号墓、6 号墓については位置の測量が行われました。昭和 60 年(1984 年)には地元住民からの情報によって 7 号墳が確認され、また同じ住民が、これを遡る昭和 54 年(1979 年)4 月に筍の採集中に偶然 8 号墓を発見していたといわれています。

三鷹市は、市内の横穴墓の中から見学のしやすさを考慮し、出山横穴墓群 8 号墓を発掘することとして、平成 5 年 2 月から 5 月にかけて発掘調査を行いました。その結果、翌平成 6 年 3 月には出山横穴墓群 8 号墓は東京都の史跡となり、さらに同年 10 月から翌年 1 月にかけて保存整備に向けて地中レーダー調査、ならびに

出山横穴墓群 8 号墓の墓前域の発掘が行われ、この時のレーダー調査によって、第 9 号墓と第 10 号墓が発見され、続いて 1995 年 9 月から 10 月にかけて、未発掘の墓前域の調査を目的とした出山横穴墓群 8 号墓の第三次発掘調査が行われました。現在、出山横穴墓 8 号墓は見学しやすいように整備され、昔の墳墓の状態を現代に詳しく伝えていきます。

■三鷹市大沢の里

東京都三鷹市の西端部野川沿いに「大沢の里」はあります。「大沢の里」は国分寺崖線の自然を活かし、水田や古民家、水車などが保存され、武蔵野の農村風景が残されています。「大沢の里」の中心となる部分は野川の右岸、河岸に広場が設けられ、小公園のように利用することができます。広場の北側には湿性花園が設けられていて、湿地の中を木道が辿っているから、木道を歩きながら間近に湿地の自然を観察できます。



広場の南側には水田が横たわっています。これもそれほど広い規模ではありませんが、長閑で美しい農村風景を見ることができます。ちなみに、この水田は三鷹市で唯一の水田だそうです。

■三鷹市大沢の里古民家

「三鷹市大沢の里古民家」は「大沢の里」の北に奥まった国分寺崖線沿いにあります。養蚕や山葵栽培を営む農家である箕輪家の住宅として 1902 年(明治 35 年)に建てられたもので、「四ツ間取り」の典型的な農家の家です。幾度かの改修を経て 1980 年(昭和 55 年)頃まで民家として使われていましたが、2007 年(平成 19 年)に所有者の箕輪氏から三鷹市に寄贈され、2009 年(平成 21 年)には「旧箕輪家住宅主屋」として三鷹市の有形文化財に指定されました。



「旧箕輪家住宅主屋」は 2016 年(平成 28 年)から復元・整備工事が始まり、2018 年(平成 30 年)に完了しました。工事に際しては建物を一旦解体、1950 年(昭和 25 年)～1980 年(昭和 55 年)頃の佇まいに復元しました。「崖線沿いの緑や湧水、山葵田が残る環境」と一体になっていることが重要とのことで、現地保存であり移転はされていません。本来は茅葺きであった屋根は、消防法の制限によって銅板葺に改められています。

建物の内部の見学も可能で、間取りの様子や各部の造作を丹念に見学でき、かつて使用されていた調度品なども展示されています。

建物の裏手には国分寺崖線が間近に迫り、この崖線からの湧水を活かして箕輪家では昔から山葵の栽培を行っていました。今も建物裏手に山葵田が残っていて、そこに残る山葵は江戸時代に栽培されていた種がそのまま残っているということです。その種を保存するための活動が市民協働で行われているとのこと。

■三鷹市大沢の里水車経営農家

「三鷹市大沢の里古民家」や水田などのある一角とは野川を挟んだ対岸、少し下流側に「三鷹市大沢の里水車経営農家」があり、武蔵野地域には江戸時代以降の新田開発に伴って各地に水車が設置されていました。そのほとんどが製粉精米に用いられる動力水車で、明治末期から大正期に最盛期を迎えましたが、昭和に入って急激に衰退し、「大沢の里」の水車も、そうした“武蔵野の水車”のひとつです。

「三鷹市大沢の里水車経営農家」は、代々水車経営を行ってきた峯岸家の母屋や水車などを保存展示しているものです。峯岸家は 1817 年(文化 14 年)以来、1968 年(昭和 43 年)に野川の改修によって水車の稼働が停止するまで、5 代に渡って水車経営に携わってきた家です。平成に入って三鷹市が八代目当主の峯岸清氏から母屋や水車施設などの寄贈を受け、屋敷地も購入、現在は三鷹市の貴重な文化財として保存展示がなされています。



この水車は 1808 年(文化 5 年)頃に造られたもので、「新車(しんぐるま)」と呼ばれました(上流に「大車」と呼ばれる水車があったため、新しい水車ということで「新車」といわれました)。築造以後、幾度も改造を受け、現存するものは 14 個の搗き臼(つきうす)と杵、2 台の挽き臼などを備えた、大型の営業用水車です。水車の稼働が停止してからも峯岸清氏が水車を保存してきたため、機構全体が良好な状態で残っています。

母屋は建て替えられていないため、元来の茅葺き屋根がそのままに残っています。1813 年(文化 10 年)頃に建てられたもので、桁行 7 間(約 12.7m)という堂々としたものです。屋根裏では養蚕を行っていました。1994 年(平成 6 年)に峯岸清氏から三鷹市に寄贈され、同年度中に復元修理が行われました。

「三鷹市大沢の里水車経営農家」は「古民家・峯岸清氏旧宅」として 1994 年(平成 6 年)に三鷹市の有形文化財の指定を受け、さらに 1998 年(平成 10 年)には「武蔵野(野川流域)の水車経営農家」として東京都の有形民俗文化財に指定されています。また、2009 年(平成 21 年)には「旧峯岸水車場」として日本機械学会による機械遺産にも認定されており、施設全体が貴重な文化遺産となっています。